これからの猪猟〈14回〉

田宮　治

人生の生き抜く術を学ぶ

家族で実践する巻き狩りはノウサギ猟が中心だった。その巻き狩り猟ですべての戦術を教えられていたが、私たち中学生がいくら頑張ってノウサギを追い込んでも、タツを張る兄たちに確実に撃ってもらえるようになるまで上達するには生半可ではなかった。

冬休みになると、来る日も来る日もおにぎりの入ったリュックを背負い、カンジキを履いて銃代わりの棒を杖にして雪の山中を必死でノウサギを追い続けていた。それも「ヤア、ホイホイホイ、ヤアーッ、ホイホイホイ」と声を張り上げ、声が途切れることなく鳴り通すのである。雪が腰まで抜かり少しでも鳴り声が途切れると、耳の良いノウサギは必ず逃げてしまう。

「鳴り声三年」と言われるように、ただ、「ヤアーッ、ホイホイホイ」の単純なこの鳴り声にも、その道の達人ともなると、その場その場の要所では山下をのぞき込むようにして思いきり怒鳴って、寝ているノウサギを追い出したり、順調にタツに向かって逃げるノウサギには低い声で「ホイホイホイ」と連続で追うのである。このようにいつも絶妙なタイミングと強弱を程良く使い分け独自の鳴り声をしていた。

実際、兄たちに追われたノウサギの逃げっぷりは凄い。まさに雪のない山でアカ号たちに追われたノウサギと同様に、大きな耳を背負いあっという間にタツまで飛んで行き、そして撃ち獲られるのである。ちなみにノウサギが何羽出ても同じコースを逃げてタツに嵌まるので、それは見事というほかない。そんなことから、私も兄たちとそっくりな鳴り声に成長したのである。

今にして思えば、父は兄たちをこの山里で人生学（楽しく生きる）を教えていたのであろう。それは厳しい幼児教育（原点）から始まり、英才教育を徹底的に施してプロ猟師に仕上げたのである。今でいえば、幼児教育や英才教育は、一流選手からオリンピック選手、さらには政界・財界の著名な方々の当たり前の基本教育である。

誰もが成功や完成を目指して一生懸命に努力する中で、幼児期からしっかりした基本教育によって、早くから人様より一歩先に抜け出すための指導は、人生の勝者に繋がる大事な基礎訓練である。だからこそ、優れた指導者や私のようにプロ猟師の父や兄たちのもとで、計画的に仕込まれた訓練が重要となってくる。それがいまだに私を頂点まで押し上げている原動力にもなっているのだ。

「何くそ！　これしきのことで負けてたまるか」と、決して諦めずやり抜くど根性と、ハングリー精神が身に付いたのは、小学校二年生（昭和二十年）頃からだった。終戦直後の全く先が見えない混乱期であり、想像を絶するような食糧難だった。

元来、この山村では大自然の恵みのもとで、百三十軒の集落全員が協力し合って、自給自足の生活を送っていた。だから戦争さえなければ長閑（のどか）に暮らせる山里であった。ところが、わが家にも戦争の嵐が容赦なく吹き荒れてきた。大切に育てた米や芋、鍋や釜までも没収されたのである。

それどころか、働き盛りの長男の喜久一に始まり、次男の幸吉、三男の幸治郎、五男の栄作、六男の満兄までの五人が、たった一枚の赤紙（召集令状）で戦地に駆り出されたのである。さらに、三男の幸治郎兄が大切に育て上げた素晴らしい種馬まで召集されたのだから両親の心痛はどれほどのものであっただろうか。

父は「幸治郎の馬術は凄い。村人からも頼りにされていたのに残念だ」と言っていた。車がまだ通っていない村道を蹄の音も高らかに疾走していた幸治郎兄の勇姿は幼かった私の目に強烈に焼きついている。

父はそんな幸治郎兄を「狩猟も一番上手いし、馬の手入れと訓練は素晴らしい」といつも自慢げに村人や私たちに話していた。それもそのはず、幸治郎兄は農耕馬の牧者として繁殖と改良・完成に努めていたのである。

両親は残された七番目の春江姉（長女）から七男の一己、八男の私、次女の喜江、そして九男の幸治（ちなみに四男芳松と三女美江は死亡）までの七名と祖母の生活を必死で守っていた。戦争とは国民の自由や財産、そしてかけがえのない人命までも根こそぎ奪うものである。わが家でも次男幸吉と三男幸治郎が戦死した。

両親はこうした絶望と悲しみのどん底を乗り越えなければならなかった。人間である以上、このどん底から這い上がる努力や根性がいかに大切であるかを両親は自らの努力で乗り越え、その実践の姿を、身をもって見せてくれた。そして、私たちに人生を生き抜く術を教え導いてくれたのである。

その頃の小学校は子供たちの教育の場とは程遠く、校庭では小学生や主婦までが木刀や竹槍を持って敵に立ち向かう軍事教練が行われていた。学科なども軍国教育そのものだった。生国の小学校は生徒数が少なく、一・二・三年生が一クラス、四・五・六年生が一クラスの複式授業だった。そのため、郡内にただ一校の高校に進学するのは大変だった。

当然、幼稚園や保育所などあるはずもなく、両親は子育てや教育まで自力で確立して実行していかなければならなかった。両親は大家族の生活を守るため、朝早くから日が暮れるまでただ黙々と働き続けた。そして、ようやく終戦となり平和は訪れたものの、戦地から帰って来た兄たちは厳しい戦争のため平常心を失い、すぐに家業に戻れる状況ではなかった。

そんな中、両親は家族全員に仕事の役割を分担させ、各自に責任と自覚を持たせ、与えられたことをしっかり考えてやり遂げさせることで、将来、どんな状況下でも生きていけるための意識を植えつけさせたのである。

ただ、無条件降伏という敗戦だったので、物資不足や就職先が全くないという状況だった。この大家族の生活を守るために、従来にも増して農林業に専念し、その支えとなる家畜を飼うために広い敷地に畜舎を建て、牛や馬、ヤギやヒツジ、ブタなどを何頭も飼った。他にも庭にニワトリ数十羽、田んぼにアヒル数十羽を放し飼いにしていた。

これは何もないところからすべて自力で生活資源を生み出したものであり、両親の自給自足の礎となったのである。日本中が敗戦の混乱期にあって、誰にも頼れない中で、家族一丸となっての再起に向けた取り組みだった。

父は兄たちに指示し、孤立無援（最寄り駅から八キロも離れており、バスも車も通れない）の山村に、二台の馬車で物資輸送に乗り出したのである。さらに山林や大杉林まで使っての新しい事業を試みたのである。

山林では多くの焼子まで雇って木炭を焼き、東京の市場に出荷していた。私たちの将来のために大切に育てた大杉林を惜し気もなく切り売りして学費として仕送りし続けたのである。

当時、先祖伝来の財産は何があろうと絶対に手放してはならないしきたりの集落にいながら、父は「杉林は切ってもまた植林して大事に手入れすればすぐに大杉林になるよ」と、毅然として伐採を断行したのである。村人の謗りなど気にせず仕事で稼いで不足分は材木を売っていた。

家族の絆

まず手始めに、まだ若かった陸軍士官学校で軍人を目指し挫折した満兄を、新潟青年師範学校（新潟大学）に再入学させ、教師として再出発させた。それを機に新しい時代を見据えて私たち全員を高校や大学まで進学させてくれた。

父は自分ができなかった夢を子供たちに懸け、その思いをいつも酒を飲みながら「これからはお前たちの時代だ。こんな村にとどまることはない。どんどん都会に出て行って思いきりやってみろ。そのためには学問が一番大切だ」と、口癖のように話していた。

それ以来、毎年春から秋の雪が降るまで、農林業と運送業に専念し、猟期が来ると家族一丸となって狩猟に転進していた。この山村では雪が多く他の仕事などできなかったからである。

わが家の狩猟は、食糧の米以外の生活に欠かせない食肉やお金（毛皮）の作り処であり、共猟作業は家族共通の楽しみと意志交流の場として大切なものになっていた。

父は苦楽を共にする狩猟を、子育ての要と考えていたようで、極寒の中でも耐え忍び、必ず獲物に勝つ術を教え続けていた。特に負けることが大嫌いだったので、私が上級生と喧嘩して負けて帰ろうものなら「もう一度行ってやっつけて来い」と言われ、途中で投げ出して負け惜しみを言ったり、駄駄を捏ねて母を困らせたりすると、必ず叱りとばされ鉄拳制裁を受けていた。

そんな中で、母はいつも父をなだめる心の優しい人だったので、子供たち全員が母から怒られた経験などなかったと思っている。そんな厳しい父だが、いざ猟期になると一変して子供たちと心から楽しさを共有しているようで、悪ガキの私でさえも猟のことで怒られたことは一度もなかった。

私が仔犬に腹を立てて叱っていると「治や、仔犬は褒めて撫でながら教えるもんや。仔犬を上手に仕上げられれば猟師も一人前さ」と、にこにこ笑いながら言っていた。私は事あるごとにこの頃のことを思い出し、今もって参考にしている。

現在、猪犬を何十頭も飼い続け、どんな大猪にぶち当たっても平気でいられるのは、やはり子供の頃に培った多くの動物たちの飼育体験と厳しい狩猟体験に基づくものだと思っている。

生活に欠かせない獲物を必死で確保していた狩猟の場は、今や欲しいと思えば簡単にいくらでも調達できるスーパーマーケットになり変わったわけだから、わざわざ辛い体験までして厳しい狩猟をやる必要もなければ楽しいはずもない。だから、狩猟を志す若者が少なって当たり前なのである。

この右肩下がりの狩猟界を何とか活気づけたいとの思いから、こんな状況下でも参加してくる若者たちに期待しているのは、どんな苦労や逆境にも打ち勝って狩猟そのものを根本から改革改善してほしい。そして、楽しくて面白い安全安心で、趣味とかスポーツ感覚を超越し、どんどん押し進めてくれるスーパー狩猟人が出てきてほしいと願っている。

何とも難しい話だが、せめてそんな後人（こうじん）に伝えたくて、すぐに役に立つスーパー猪犬作りや、私のたどった幼児教育（原点）から英才教育、そして頂点までの道程を発信しながら、その大切さを分かっていただきたいのである。

私はいつも父を頂点に兄たちがいて、そのお陰で今の私があると思っている。実際に父が人生を懸けて教え導いてくれた伝統狩猟は、まさに時代を超越した今でも通用する素晴らしい戦術だと思っている。その事実を証明したのが、一九八七年十二月六日に実践した本場山熊田集落での熊猟だった。熊猟は雪の降る前、つまり冬眠に入る前と冬眠から目覚めた時期（五月連休あたり）に行うのが基本となっている。

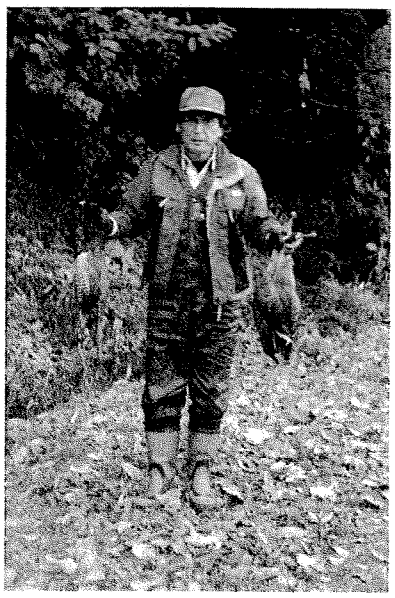
この五月連休あたりに実践する熊猟は特別な意味を持っている。冬眠から目覚めた熊は、空腹のため残雪の山から下りて春一番に芽吹く若草やタケノコを求めて集落や道路近くに出没してくる。時には人を襲う悪さをするので、その

危険防止のために駆除をやるのであって、決して無分別に撃ち獲っているのではない。

昔からこの集落ならではの、大自然の恵みである熊を獲って食べる伝統に則り、大事に熊を守りながらほどよく駆除することで、永遠に熊猟が続けられるように適正化を図っているのである。

熊は宝物として大事に神格化されたもので、その表れが今でも毎年五月連休あたりにこの山村で盛大に行われている熊祭りである。

生国の熊猟は狩猟の最高位にあり、当然、実戦となると旧中俣村（小俣、中継、大代、雷の五村）の全猟人と村人の総力を結集して盛大に行われる。



生国でのカモ猟

ところで、一九八七年十二月六日の熊猟をなぜ今になって話す気になったかといえば、生国の山村で父に幼期から厳しく鍛え上げられた兄弟たちがそれぞれの道を自ら選び努力した中で、狩猟そのものが各自の人生でどのように成長してきたのか、そして、四十年経った一九八七年まで挑戦し続けてどれくらい大成したのかを、この日の一戦で熊と戦った勇姿を分かってもらいたかったのである。

ちょうど私が五十歳になって猪猟にも傾注しており、猪犬完成に夢中だった頃である。猟期が来ると毎年欠かさず必ず仕事を一週間休み、満兄たちとの共猟を楽しみに帰省していた。

父は私が日産自動車の販売課長の三十五歳の時にガンで亡くなったが、その時、私は課長職にこだわるあまり死に目に会えなかった。だから、せめて墓前に手を合せるのと、やはり生まれ故郷で思う存分兄たちと猟がしたかった。

また、父母が元気でいるうちは毎年のように私が帰省すると、満兄も必ず帰って来て、共猟で獲ったものを肴にしてワイワイガヤガヤと忌憚なく語り合って旨い酒を飲み合うのが、この上ない楽しみであった。

その時、決って満兄は酔いが回ると、いつも「戦友」を歌い出すのである。囲炉裏を囲んで家族みんなが手拍子をとると、満兄は感慨深く歌い続けたものであるが、そんな時、母はいつも戦死した兄たちを偲んで涙を流していた。

両親は仕事をするにもどこに行くにもいつも一緒に仲の良い夫婦で、子供たちをこよなく愛していた。将来を案じて進学させて実力を付けた上で、広い世界に出してもらったので、どんなに忙しくても必ずお盆や正月は家族を連れて里帰りしていた。

お陰で兄弟全員結婚したが両親をお手本に一組も離婚はしていない。狩猟だけでなく、人生のすべてを私たち兄弟は両親が身を削って仕送り続けてくれた援助と、壮大な愛のお陰で一人前に成長したのである。

さて、一九八七年十二月六日の熊猟の一報が入ったのは、そんな帰省の共猟でヤマドリを獲って満兄と一杯やっている最中だった。満兄が教員の時に猟を教えていた山熊田集落の猟師からであった。

その報によると「雪上に良い足跡を残して集落近くの山に入っている。雪が一メートル以上もあるので、そう遠くまでは動かないだろうから明日全村あげて巻き狩りをやるので小俣地区（私の村）も来てほしい」とのことだった。

そこで、小俣集落からは栄作兄（猟友会長）と満兄と私、それから田宮正喜（小俣村の半分は田宮姓であるが他人）と春江姉の長男義信の四人で、雪道の峠を越えて山熊田集落に向かった。到着したのが八時頃だった。（つづく）